

香 蘭

香 蘭

2019年(平成31年)2月号
牧田明子歌集『風の三叉路』批評特集
第96巻 第2号 通巻1058号

目 次

村野次郎作品 今月の特選……………	私の愛謡歌(42)	伊藤(美)・石井・鈴木(桂)……………	満木好美……………表二
近詠十五首 作品……………	風味絶佳―シユガー&スパイス―……………	大井田・西野・水本・坪宮口弘美……………	6 4 2
故・西沢前選者 村野次郎への旅(107)……………	追悼号予告・原稿募集……………	千々和久幸……………	30 20
歌の生まれる場所(74)……………	明宝研究会第一〇一回十一月例会……………	柏原貞雄……………	19 51
牧田明子歌集『風の三叉路』批評特集……………	中川 佐和子(32)・小島 熱子(34)・佐久間 佐紀(36)……………	関野道哲……………	50 42 22
エッセイ・自由研究 短歌の定型とリズム……………	桜井 京子(38)・石井 雅子(40)……………	長野道子……………	6 6 4
魚点抄(十二月号)……………	近詠十五首「危険な夏」評(十二月号)……………	岡元子……………	64 62 61
七首抄(十二月号)……………	作品一……………	香岡静美……………	60 58 56
作品一特選欄評(十二月号)……………	作品二……………	小森田唯見……………	77 60 70
作品三……………	香蘭集……………	大井田啓子……………	76 67 66
緑地帯……………	転載 千々和久幸著『酔風船』評……………	森田大井田……………	67 60 70
歌誌渉猟「香蘭十月号」……………	大下一真第一歌集「存在」評……………	加藤藤啓……………	77 60 70
他誌拝見……………	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き……………	和木英郷……………	78 79 77
歌会及び会合・会員消息……………	編集後記・新宿日記……………	本木久彦……………	77 60 70
平成三十一年度 香蘭短歌会全国大会のご案内(概要のお知らせ)……………	表紙絵……………	田和雄……………	81 80 79
表紙絵……………	中村陽子「鏡を置けば」……………	目次カット……………	95 90 81



2019年(平成31年)2月号

牧田明子歌集『風の三叉路』批評特集

第96巻 第2号 通巻1058号

満木好美

硝子戸に青葉せまりてすがすがし暑き日は

児をここに寝かさむ

五月の青葉が美しいころ、自宅の縁側に硝子戸越しの木漏れ日を受けながら清々しい心もちである。暑くなつたら生まれ間もない子とここで一緒に過ごしたらさぞ気持ち良かったろう。情景がスルスルと立ち上がり、また四、五句には父性が覗く作品である。

同じ年の作品に「生れ児のいまだ見えざる眼の上にかぶさりて父の顔を見せしむ」もあり、若い父親の愛情が満ち溢れている。

この機に読み返してみれば、意外に肉親を詠まれた作品が多い。私が香蘭に入会したころには、次郎先生はもう亡くなつておられた。畏れ多い存在でありましたが、これらの作品に出合い親しみが湧いてきた。

この作品は大正十一年、先生二十八歳の作。大正十一年は香蘭詩社の創立、「香蘭」創刊を目指しておられた年である。公私ともに希望に満ち充実した日々であつたと思われる。

〔夕あかり〕78頁、「村野次郎三百首」10頁に所収

〔夕あかり〕

四 選 者 の 作 品

感傷的な酒場

平塚 千々和 久幸

百日紅もアメリカ芙蓉も花を終えあてなき一人の秋がまた来る
雨が降るただ雨が降る十葉に小笹に灯籠、蹲居の上に

感傷的な酒場ですよと促され後ろに付きて暖簾を潜る

ハロウイン 戦に征かぬ若者が盛り場に荒るるを誰も制止せず

「オリウス」の灯りが消えてこの街に約束のなきひと日が終る

夜の更けにああと声あげ傍らに誰も居らねばただに黙せり

輪郭の鮮明な夢見ていしが覚めれば淡きかなしみに似つ

十日間放置し様子を見ましようと放置をされて病院を出づ

憂さの因

横浜 渡辺 礼比子

旅の日のうたたね覚めて見はるかす湖畔の丘が夕日に染まる
笠雲が富士山隠す夕まぐれ展望風呂を去りがてにおり

歌こそが憂さの因なれ さはされど今日は歌作に憂さを忘れつ

姿見ずなりて久しき向かい家の人の訃を知る自治会報に

ブリーチをしたれば染みは隠れしがどのみち元の白さ戻らず

「血管は年齢相応」クリニックの窓辺の川は潮満ちたり

なにくれと庇われいたりしましはし氣付かぬふりに甘えていんか
車中にて別れの握手交わししが十余秒ありドア開くまで

心に生きる

鎌倉 香山 静子

選者とふ重き荷背負ひ共々に歩み来し日々おろそかならず

暮参にと訪ひたる霊園あまりにも広きにわれら右往左往す

芙蓉一花は大きく咲けり晩夏の庭にうすべにの体張ること

六千歩今日は歩かうあそこにもここにも咲いてる黄色の石露が

どの花に羽根休めむとしばらくを黄の蝶庭を飛びめぐるなり

逃れえぬ一つかこれもあくがれし兄は北辺に老いゆけるなり

六人生み三人病に失ひし母は強しもわれら育てて

『この国のかたち』六冊並びあて心に生きる司馬遼太郎

腰痛

我孫子 丸山 三枝子

来る年の古希を祝うとわがために白すずしかるプリンセチア買う
紅葉どきを遠目にわれの腰痛はいすわりつづけもう冬隣

極月の公園しずか 腰痛のわれと目を病む犬と憩えり

身動きのできねば形成外科の椅子に四時間待てと言ひ渡さるる

病院のレストランに山菜蕎麦たべているなり腰痛われは

レントゲン技師に庇われ身を起こすとき紛れなき老女わたくし

十二年大と暮らして瞬く間に老いたり大もわれも七十歳

作品一特選



(二月号作品、五選者共選)

ゾンビの映画

川崎 伊藤 美恵子

ハロウィンの行列のさばりいるならん待つても待つてもバスは来なくて見てたのはわたしのような人ばかり平日昼間のゾンビの映画こんなところで死んでしまつては大変と温泉宿に夫を見張るも灯台の遠く光れる浜に立ち波を見ていつ波の果を

上げ潮の海に寄りゆき手を浸す水温かし母のごとしも妹の墓にまたゆく 弱虫のいもうといつまでも弱虫のわたし新しく買ひ来し庭椅子この庭になじめぬらしくお客顔する

袋小路の男

習志野 石井 雅子

川ひとつ渡りあなたの住む町にゆくはずだつた夏の終りに住んでゐし実家は小路の突き当り「袋小路の男」と言へり塩書を浴びし桜は秋の陽に三輪の花咲かせてゐたり

クリスマスツリー

東京 伊藤 康子

抱えきれぬ憂さを仮装に包むのか 渋谷のええじゃないかハロウィン吹き抜けるロビーに脚立の並びたる クリスマスツリー組み立て開始工事中の赤いコーンに仕切られてツリーの骨組み五メートル越ゆクリスマスツリーの周りに電飾の作業員等の大きなバツグ続きたる小春日和にサルビアの満開のまま霜月のいく来訪神の仮面を披る人の言う今はコンプライアンスがあるから土足にて上がるなそこは入るなと来訪神に注文の付く

山茶花讃歌

川崎 大井田 啓子

山茶花の枝巡りある蟻のをりわが見てをれば休むでないぞまづ咲ける一つが枯るるを待つらしきくれなみ見せて奮ひしめく山茶花にピンクのつぼみ挿けりひとつ残らず咲くつもりらしひとつ枯れ一つ咲き継ぐ山茶花がいづれ一氣に花ひらくべし植木市を夫と巡りし日のありき山茶花今年も挿きて咲くじやがいもの皮を剥きつつ山茶花に水遣らねばと思ひ出したたり前庭に繁る山茶花数本を処分し終活はじまりにけり

茗荷

東京 西野 美智代

六月の十四日付けに届きたる(あらあら御免)の端正な文短歌食みて生きると言ひし華奢な身の才女を逝かせ深まれる秋この夜も想ひは巡る忘れてはならないものに給ひし茗荷

キャスターは美形が多くその中にそれなりの娘を見れば和めりお見合いの写真をいそいそ持つてくる「お節介おばさん」消えて久しき組織票の不正投票疑らる「ゆるキャラグランプリ」のことではあるがベシミズムの書き込みありて短歌的抒情を嫌ふ歌集か手強し

冬

西宮 鈴木 桂子

あかあかやあかあかやシクラメン、ポインセチアの街にはなやく紅白の出場歌手の決定を聞きて年末ぐつと近づく

池袋、新宿辺りに拾ひしと(東京の銀杏)友の送り来さびしさに街迷ふにはあらねどもさ迷へばかくさびしきの湧くマンションの後ろにさらなる大きなマンション建つらし 工事始まる生きるとは敗れ続けることとして夫の輸液のはづされし夕平成の終りの近し路々にひかる電飾列なす尾灯

空

多治見 加納 喜美

この夏の猛暑たがいに案じ居て人伝に聞くまさかの別離「退院したらホームに入ります」電話のあとの永久の空白この世での僅かな逢いをハグで締め一期一会の名古屋大会有るだけの今年の想いの葉を散らす桜古木の秋のひたすら結末は仕合せとして九十年戦争を知らぬ子等と陸みて有難うと言つては捲つたカレンダ―大正昭和から平成へつぎつぎと猪が死ぬ豚コレラ狩猟禁止の山の冷えゆく

槍ヶ岳を映すドローンが捉へたる真つ白な虹しろき層なす代々木局の消し印しるく中身なし社のカラスが掠め取りしか晩年の圓生が身を乗り出して「妾馬」かたりし寄席の半券十五夜の尾花の味がそこはかと分る齡にいつかなりたり

伊部に挿す

倉敷 水本 美恵子

一枝のピラカンサスを持ち帰り暮れ急ぐ部屋の伊部に挿せりだんじりの太鼓が近く聞こえる門あけ放ちてだんじりを持つ神酒代はりの護符を頂き家中に熊野大社のご加護がとどく咲き残る昼顔校庭のかたすみに一輪小さき花をかかけて剪定の済みたる庭にあしたより鶴の来て鳴く声はり上げてとりたてて嬉しくも無くなししみも淡くなりゆく一生と思ふ風邪のため声帯痛め言葉の出ずそれでもおほかたスムーズに過ぐ

強き人

東京 坪 裕

一生を短歌にそそぎ悔いなきか薄羽蜂のすることく生きにき一筋に短歌の道を歩み来てあつけられかんと逝きてしまえりピンピンコロリに逝きたいなどと願つたあなたの望み通りになつたねもう二度と握手の温もり伝わらず恩師の墓前に手を合わせたり深深とお祈りしたり墓標まで冬の日差しをわすかに届かずしのぶ会に向かうバス中騒ぎいる生きるわれらの現実である高潔に歌を極めて鉛筆の芯のようなる強き人なりき

風味絶佳—シュガー&スパイス—

宮口 弘美

野放図に煌めく街を上弦の月が見おろすクリスマススイブ
水面へ反射する西日の眩しさに顔しかめつつ鳥影を追う
富士山の美しく見ゆる冬の日の屋上にきてひとり飯食ぶ
自販機にスマホかざして缶コーヒー買いいる息子も昭和の生まれ
惚けても爪美しく伸びており老い母の爪切りやる七月
午後九時にソファで寝ても叱られぬ楽しからずやおひとりさまは
青信号点滅しても走らない余裕か老化か定かでなければ
キャラメル宣伝文句に知りてより「風味絶佳」に憧れてやまず
ごおごとと雨風の鳴る真夜目覚め台風がわが上にいることを知る
しゅわしゅわと炭酸はじけるハイボールひとり飲み干せば秋風の吹く
最上川ゆったりただ静かなり芭蕉が詠みしは何処のあたりなる

近詠十五首

ひと言随想

奇跡の日々

宇多田ヒカルの歌が好きだ。最初は早熟な天才の作る曲だと思っていたが、藤圭子という個性的な母親の元で育ち、母親の間には複雑な葛藤があったらしい。数年前の母親の自死を経て、彼女の歌詞は深みを増し、哲学的な思索さえ感じさせるようになった。彼女の天性の切なく震えるような歌声と相まって、どの曲も私の深い所へ響いてくる。中でも、「代わり映えない明日を下さい」という歌詞

は秀逸だ。彼女は平穏な日々というものがどれ程の奇跡に支えられているか、既知知っているのではないか。また三十代だということに。私は暫くこの頃その事が身にしみて理解できるようになったというのに。それこそ、チョコちゃんに「ポーツと生きてんじゃねーよ」と叱られるレベルだ。そんな私がこの一年を詠んでみた。何の物語もない日常。けれど毎日
は小さな奇跡に満ちている。

背を丸めベンチに座る若き等はスマホでゲームものおもう秋
グーグルのマップをスマホにインストールすべきかもしれない原宿路地裏
老い父を助手席に乗せいざゆかん蕎麦屋めぐりの今日は「愛庵」
父もまた母に負けじと惚けだし次の廃品回収日はいつ

村野次郎への旅(107)

わが青春の村野次郎(107)

千々和 久幸

柳沢靖子、水室岩根子、兼子操、平賀富久子、橋本和明、江利山玉枝。

1965(昭40)年12月号の先生の巻頭歌は、「紅葉の谷川岳」八首である。

①吹き散りし紅葉の中に空高く舞ひつつ谷を越えし一葉あり

②空中をリフト進みて全山の紅葉見え来る股の下より

(空中をリフトは吊られ全山の紅葉見え来る股の下より)

③谷川の死の尾根は別の峰にしてこのなだりの一面の紅葉

(谷川の死の尾根は別の峰にしてこの山は安けき一面の紅葉)

④ことごとく木々紅葉せる山の奥今日来て秋の酣に会ふ

(ことごとく木々紅葉せる山の上今日来て秋の酣に会ふ)

⑤紅葉せる枝に小鳥の来てとまりたちまち古風の構成となる

(紅葉せるよき枝ぶりに鳥の来てたちまち古風の構成となる)

⑥曇りつつ視野にすらなる尾根尾根のみ冬に入らん深きしづもり

⑦すがりつつリフトにて山の標高を真剣な顔が次ぎ次ぎ降り来

(山の標高を越えて来りしリフトより真剣な顔が次ぎ次ぎ降り来)

⑧行楽終へてわが家俄に目に浮び人ら土産物店の前に集る

(満足感もちて行楽終へし土産物店の前に集る)

今日の巻末の歌会欄に、次のような記事が掲載されている。

水上、谷川岳吟行、十二月二十四日、二十五日、村野次郎、大貫迪子、河北昌子、三島ゆき子、松本紀久子、重松紀子、望月好子、

察するに今月の先生の「紅葉の谷川岳」一連は、この吟行の折のものであろう。12月も押し迫つての吟行にも驚くが、先生の作品は当月作歌、当月入稿、当月発刊とその離れ業(?)にも驚きである。

それかあらぬか初出作品は、歌集では6首が手直しされている。今月はその推敲を中心に見ていこう。

①の歌、例によつて一連の序歌の趣で歌われている。今回も思うのだが、動きのある眼前の光景は現在形で歌われてしかるべきだと思うが、先生は直前の過去として表現されている。わたし流儀に勝手に詠み直せば、「吹き散れる紅葉の中に空高く舞ひつつ谷を越ゆる一葉あり」となるのだが、先生には出過ぎた意見かも知れない。当時先生の周辺に居た幹部同人はどう読んでいたのだろう。

②の歌、推敲されたのは二句の「リフトは進み」が、「リフトは吊られ」に直つてるところである。動きのある初出を採るか、静止状態と捉えた歌集の方を採るかだが、わたし

うふうに高さを明示するのが普通だが、単に山を降りたのであれば、「山の高みを」とか「山を越え」でよいのではあるまいか。

⑧の歌、初出、歌集ともに結句こそ「土産物店の前に集まる」だが、初出はそこに辿り着くまでのプロセスが盛り沢山である。読者にはいささか煩雑な説明になつてゐる。ここでは歌集の方がすっきり読める。

さて2010(平成22)年4月号から毎月書き送ってきた本稿は、2019(平成31)年2月号(本号)を以てひとまず終る。

『村野次郎歌集』で言えば、1957(昭和32)年4月号から1965(昭和40)12月号までを続んだことになる。わたしの青春もそこらが終焉という訳である。

わたしは第1回目にこう書いた。「村野次郎作品論でも作家論でもない、かと言って伝記でも「香蘭」史でもない何か。そんなわたしのさすらい心を、会員諸兄がともに愉しんで頂ければ幸いです。」と。

そんな気持ちで新たな旅を続けたい。わたしの青春は潰れても、村野次郎への旅に終りはない。引き続きこゝ愛読を。

は初出を採りたい。

それよりも少し戯けたような下句が面白いではないか。思わず「股の下から竜を見る」天橋立を連想したが、こちらは移動して刻々姿を変える光景だから趣が違う。

③の歌、谷川岳は群馬県と新潟県の県境に跨がり、太平洋側と日本海側とを分かち中央分水嶺に属する山で、急峻な地形と目まぐるしく変化する天候により「遭難者世界一の魔の山」と呼ばれている。そして遭難者の殆どが、一の倉沢に広がる岩壁でのロッククライミングでの遭難である。

先生を含めた吟行会の一行は、はじめから「死の尾根とは別の峰」を選び、のんびり紅葉狩りを楽しんだのだった。

初出の五句の「このなだりの」は、歌集では「この山は安けき」に直つてゐる。推敲で意味は鮮明になったが、逆にこれだと読者への過剰サービスになるまいか。

④の歌、この一見なんでもない光景が、軽妙なリズムと無駄のない言葉運びで生彩を帯びてくるところに、注目すべきだ。

ここでも三句が手直しされているが、初出の「山の奥」はやや間違った感じがするので、

歌集の「山の上」の臨場感を採りたい。

⑤の歌、眼目は下句の「たちまち古風の構成となる」にあるが、どことなく芝居のト書きを読まされていくように乗り切れない。実験的な表現とも言えようが、先生には珍しい表現で、やはり外側から言葉をあてがつたという印象を拭いきれない。

先生にはこの「古風」に愛着があつたものか、それとも凡庸な光景だとして距離を置いて見られたものがハッキリしない。

初出の上句「紅葉せる枝に小鳥の来てとまり」が、歌集では「紅葉せるよき枝ぶりに鳥の来て」と外連味を加味したところは、ト書き的な構成に照応していよう。わたしは凡庸だが味わいのある初出を採る。

⑥の歌、初出と歌集に異同はない。現実の再現に軸足を置いた穏当な叙景歌である。学ぶべきは先生特有の下句、就中結句の呼吸である。この呼吸は先生独擅場である。

⑦の歌、この作品も大幅に手直しされている。難物は「山の標高」で、この表現がいま一つ熟さない。初出では「山の標高を降り」であり、歌集は「山の標高を越え」である。

例えば標高1997メートルの谷川岳とい